

# 海外留学の意義と効果

## —短期海外研修&三カ月留学—

湘北短期大学総合ビジネス学科教授・  
グローバルコミュニケーションセンター長

黒崎 真由美

KUROSAKI Mayumi

キーワード： 海外留学プログラム、異文化理解、人材育成

### 1. はじめに

本学には、英語を専門に学ぶ学科はない。しかし、グローバル企業であるソニー株式会社を設置の母体としているため、開学以来「国際理解教育の推進」を大学の基本ポリシーとして、「英語に頻繁に触れさせることを通じて、英語コミュニケーション力を養成する様々な取り組み」を行ってきた。具体的には、1980年に開始し、昨年まで800名以上が参加した①短期海外研修旅行。1994年に開始し、昨年まで180名以上が参加した②三カ月留学プログラム。キャンパスに、海外姉妹大学の教員や学生を受け入れ、交流を行う③エクステンジプログラム。このほか誰でも気軽にネイティブの教員と英語が話せる④イングリッシュラウンジ。高校生、大学生を対象とする⑤英語スピーチコンテスト等である。これら一連の取り組みは、平成16年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」に選定された。

近年、大学教育においてもグローバル化の必要性が叫ばれ、国際的な競争と協同に関して取り組んでいかなければならない状況下において、短期大学のグローバル化は、大学の機能を高めつつ、有為な人材を社会に輩出するうえで、大きな責任を持っている。本稿では、継続的に実施してきた、「短期海外研修」と「三カ月留学」の意義と教育効果について記述する。

### 2. 「短期海外研修」と「三カ月留学」

感受性の豊かな若い時期に、異文化を体験することは非常に重要であるという認識のもと、「短期海外研修」（2週間～3週間 夏季あるいは春季休暇中に実施）は、過去にアメリカ、ニュージーランド、カナダ、オーストラリア等で実施。「三カ月留学」（三カ月間 10月初旬～12月下旬に実施）は、カナダとオーストラリアで実施してきた。現在は、両プログラム共に教職員や学生の双方向交流を活発に行っているオーストラリアの姉妹大学国立ニューカッスル大学（以下 UoN）ランゲージセンターで実施している。メリットは、①語学教育に定評がある。②治安が良い。③オン・キャンパスで学修ができる。④現地学生との交流が可能。⑤良質なホームステイ先が確保できる等がある。

短期海外研修には、本学の教育交流協定校である、長野県の松本大学松商短期大学

の学生も2004年度から参加しており、海外のキャンパスという舞台で3大学(湘北・松本・UoN)の学生交流の場にもなっている。なお、この研修は、全学科の希望学生が参加可能なプログラムであり、2単位が認定される。

「三カ月留学」は、総合ビジネス学科観光ビジネスフィールド留学エリアの学生が参加し、14単位を認定する正規教育課程プログラムである。1994年から1999年までは、カナダのビクトリア州立大学で、2000年からはUoNで行っている。授業は、5段階のレベル別に分かれた少人数授業で行われており、世界各国からの留学生との異文化間交流が可能である。また、本学学生用にTOEIC講座を開講している。

### 3. 留学事前学習指導

留学事前学習は、単位認定の一環であるという位置づけをもって行っている。英語教員と海外研修の引率経験のあるグローバルコミュニケーションセンター所属の職員、そしてUoNからの招聘教員が協働で指導を行う。滞在方法が全期間ホームステイであることから、その意義やホテルステイとの違い等、留意すべき事項についての指導を徹底している。研修出発前には、学長出席のもと、結団式を実施している。短期海外研修の場合には、参加する松本大学の学生と引率者も来学し、事前の顔合わせと交流が行われる。

下表は、2012年に実施した「短期海外研修」の事前学習の内容である。

回	内 容
第1回	・事前学習スケジュール確認 ・健康チェックシート配布 ・パスポート申請について
第2回	・外貨・海外旅行保険・レンタル品について ・研修資料配布(勉強会用)
第3回	・海外に行く心得(生活) ・ホームステイについて
第4回	・基礎英会話(自己紹介・あいさつなど) ・留学先ニューカッスル大学について ・ホームステイについて
第5回	・海外に行く心得(健康・安全) ・カルチャーショックについて ・日本文化学習
第6回	・リーダー、イベント、役割の決定
第7回	・英会話(日常会話)
第8回	・松本大学参加者との顔合わせ交流
第9回	・結団式 ・事務連絡

「三カ月留学」に関しては、UoNで教鞭をとるTESOLの有資格教員を前期に招聘し、学生の指導にあたってもらう。招聘教員は留学クラスの学生を中心に、正規授業、特別授業、イングリッシュラウンジなどを行う。8月には帰国し、渡豪する本学学生のケアを行う。前期滞在中に、学生の英語能力や性格を把握しており、的確な指導が行われる。学生は現地に適応するまでに、既知の英語教員がいるという安心感のもと、

学修に打ち込むことが可能となる。招聘教員からは、学生の状況が定期的に本学にレポートされる。

指導は、入学直後のガイダンス・保護者説明会に始まり、出発までに本学教員による課外授業を12回程度、招聘教員によるものを14回程度実施する。特に、滞在のハイライトとなるホームステイについては、留学の満足度を左右する重要なものと位置づけ、指導は詳細に互る。核家族化が進行し、またホームステイ文化が醸成されていない状況下で育った日本の学生にとっては、非常に新鮮な内容となる。

時間をかけた事前指導により、本学の学生を毎年受け入れたいという現地家族からのオファーがある。

以下は、2012年に実施した「三カ月留学」の事前学習の内容である。

○本学教員によるもの（日本語、英語）

- ・ 海外で学ぶことの意義について
- ・ 留学先であるオーストラリア、ニューカッスルについて①②③
- ・ アプリケーションフォームの記入について
- ・ カルチャーショックについて①②
- ・ ホームステイについて①②③
- ・ 日本文化学習①（英語によるもの）②（日本語によるもの）
- ・ 2年生の体験談を聞く
- ・ 発音①②
- ・ パスポート取得、外貨等
- ・ ニューカッスル大学 ランゲージセンター長との面談（来日時）

○ ニューカッスル大学教員によるもの<例>（すべて英語）

- ・ Getting to know you - questionnaire
- ・ Program for Shohoku College at the Language Centre
- ・ Language Centre daily time table and class levels
- ・ Running reading - based on Language Centre brochure
- ・ Grammar
- ・ Writing
- ・ Listening
- ・ Dictation
- ・ Public Transport
- ・ Living with a host family
- ・ Cultural Differences
- ・ Explain Australian Quarantine Laws
- ・ Role play for problems which may arise

研修や留学におけるホームステイは、24時間の英語学習を意味することから、参加学生は英語という言葉を使って、ホストファミリーとコミュニケーションを取ろうと努める。「たとえ英語が苦手でも、臆せず話しかける」、「積極的に思いを伝える」と

ということがオーラルコミュニケーションには非常に重要である。

本学が実施しているイングリッシュラウンジやネイティブ教員の招聘は、学生に良い影響を与えている。

帰国後は、学長出席のもと解散式を行い、各自が感想を述べる機会を設ける。出発前には、不安な顔が並んでいたのが、「自信を持って」、「堂々と」、「自分の言葉で」感想を述べられるようになっていく。

前述したように、この研修のハイライトはホームステイであり、その意義については事前学習で念入りに指導しているが、近年の核家族化の進行や情報テクノロジーの発達、対人コミュニケーションにおいて、内向きな人を作りやすい。①全てがセットされているパック旅行とは異なるのだということ、②ホテルステイのように、サービスを要求するものではないということ、③一般の家庭で過ごすことによって、文化や生活習慣、ものの考え方等を実際に感じ取り、文化や習慣が異なる人々と交流する場合には、何に気をつけて何を大切にしなければならないのかということ、④日常会話やさまざまな交流を通じて、コミュニケーションの重要性とその方法を学ぶ機会であるということ等を、グループワークを交えて指導する。また、⑤オーストラリアは、歴史の新しい多民族国家であり、様々な人種によって国が構成されているということも指導上の重要なポイントとしている。

#### 4. 「海外研修」と「留学」の成果

我が国における従来の英語教育は、英文学に代表されるように、知識の修得を目的に読解の能力に力点が置かれてきた。その後、オーラル・メソッドという教授法が紹介され、語学学習は反復・習慣の形成であると捉え、日本語を極力使わない方法が取り入れられた。UoNで行われる英語プログラムは、Communicative Approachという教授法が取られている。より実際の場面に即したコミュニケーション力を伸ばすことに重点が置かれた、学習者中心の教授法である。学生は、買い物、旅行、空港等、それぞれのステージで自らの考えや意見を英語で発言しなければならない。英語授業に加え、ホームステイにおける英語漬けの環境は、それがたとえ短期間であったとしても、自分の考えを人に伝えることの重要性を学ぶことができる。

学修の成果を端的に顕す、本学の留学プログラムに参加した学生のレポートの一部を紹介する。(原文のまま引用)

- ・「日本人は“もの言わぬ精神”を持っていて、言わなくてもわかることが当たり前になっています。しかしオーストラリアでは違いました。・・・海外研修では、理解しよう、伝えようとする気持ちが大切なことと、言葉や行動にして伝えることがとても大切であることだと改めて感じました。」
- ・「私がこの留学で得たものは伝えることの大切さと英語への親近感である。私にとって英語は今まで「テストの点を取る」だとか「英検を取る」と言っただけのもので実践的な会話やコミュニケーションのためのものではなかった。・・・英語はもちろん勉強は必要だけど辛く苦しいものではなくて海外のどんな人とも楽しむためのものということだ。」
- ・「そして、その日(Buttai Barn)の帰りにとても星が綺麗だと気付きました。」

- ・「様々な経験をした三カ月間だった。こんなことを言ったら大袈裟だと思われるかもしれないが、私は短い人生を一度終わったような気持ちだ。このような体験をさせてくれた・・・に本当に感謝している。」
- ・「私は今回オーストラリアに行って本当によかったと思う。最初は行くかどうか悩んでいたが、オーストラリアに行ったことでたくさんの方が学べ、自分を成長させることができた。異文化に触れることで、自分の視野が広くなり新しい物の考え方が身に付き、外国から見た日本の魅力も知ることができた。文化だけでなくたくさんの方とも触れ合い、湘北生、松商短大の学生、ニューカッスル大学の学生とも仲良くなれた。また、外国ならではの景観も楽しめた。」
- ・「自分の町を、自分の国のことを何も知らないことがわかった。これまで、日本を愛する気持ちを特に感じたこともなかった。生まれて初めて自分が日本人であることを意識した。」

「短期海外研修」や「三カ月留学」の期間は、決して長くはない。しかし、充実した時間を過ごした学生その後の活動や言動の変化はめざましい。現地で「生活することによって多様な人と出会い、そこに生きる人のエネルギーや考え方を目の当たりにしながら、外国や母国である日本、家族等を考える学びを得ている。同時にそれは、自分自身を見つめなおす大きなきっかけになっている。異文化世界で暮らしている人々とのコミュニケーションを通して、対人コミュニケーションに関する知識を獲得するための大きなモチベーションを得ている。自分自身の内面を振り返る「気づき」を得ているのである。また、このことを契機に、「気づく」ことの重要性に「気づく」のである。この価値は大きい。到着直後に感じた違和感は、ホストファミリーに対する信頼感へとつながっている。この異文化体験が心を揺さぶるかけがいのないものとなっている。

これらのプログラムに参加したことによって、その後のライフスタイルを変えた学生も多数いる。ホストファミリーに英語が伝わらなかったもどかしさで、学内のイングリッシュラウンジを頻繁に利用するようになった。卒業後に長期の留学をした。国際交流委員会に所属し、活動を活発に行った。英語関係科目を積極的に履修するようになった。日本文化についての質問をされて、答えられなかったことから、新聞を毎日読むようになった。受講態度にしても、グループワークやディスカッションに積極的に参加するようになるという効果がみられる。また、英語力の向上という面では、「三カ月留学」においては、個人差はあるものの、留学をしていない他の学生と比較し、リスニング力において大きな優位性が認められる。帰国後のTOEIC試験においては、毎年留学クラスの学生が得点の上位を占めている。

## 5. 今後

政府の教育振興基本計画（2013年6月）では、「グローバル化が加速する中で、日本人としてのアイデンティティや日本の文化に対する深い理解を前提として、豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解の精神等を身に付けて、様々な分野で活躍できるグローバル人材の育成が重要である」と述べている。

キャンパス内外で「英語に触れさせる」ことを通じて英語コミュニケーション力を

養成する取り組みは、国際理解教育の推進という全学方針のもと、様々な拡がりを模索・実行していく。

本学では、多くの学生に異文化体験をさせたいという思いから、留学プログラムに対する奨学金制度を設けている。2011年からは、「三カ月留学特別奨学生制度」に加えて、全学科学生対象である「短期海外研修」の参加者に対して、「国際理解奨学金」を給付する仕組みを、ソニー株式会社の寄付により実現することができた。今後も、できるだけ多くの学生をこのプログラムに参加させるための方策を検討したい。

## 6. 終わりに

「短期海外研修」や「三カ月留学」等の、本学が行っている一連の「国際理解教育」に参加することによって、学生達は異なる言語や文化的な背景を持った人を、「同じ地球人」としてみることができるようになる。あるいはそのきっかけになっていると言える。画一的な日本社会で育った学生が、移民によって構成されているオーストラリア社会で、日本の基準とは異なる現実とこれまでの常識を覆すような事実と直面し、衝撃を受け、考える大切さを学んでいる。

ホームステイをしながら異文化を体験することは、殆どの学生にとって、最初で最後の機会になる。日本を外から見ることによって、自分の将来や家族、そして母国である日本を考える時間を持つことは非常に大切なことである。文化や背景が異なる現地の人々の生活に触れ、日本では当たり前で享受されている、モノや環境等の重要性を再認識することができる。また、思っていることを「英語で」相手に伝えようと、懸命に努力する。これがコミュニケーション能力を向上させるためには、もっとも必要なことである。

21世紀は、産業革命以来の大変革の時代であるといわれる。特に、インターネットをはじめとする情報通信の飛躍的な進歩は、世界を大きく一変させた。最新のテクノロジーにより、私たちは瞬時に世界の出来事を知ることができるし、映像テクノロジーを利用した「You Tube」等の急速な普及は、世界の出来事を映像によって身近なものにしている。しかし、その情報や映像は、自分が実際に現地に行って確認したもので体験したりしたものではないということを知るべきである。ものごとの本質を知るためには、実際の場면을体験することによって得た、心の動きを大切にしなければならない。

標準化されていく世界という現実の中で、日本人としてのアイデンティティを維持しつつ、独自の文化を継承することや、言語の大切さに気づくための学生に対する教育を継続していきたいと思っている。

姉妹大学関係者との良好な人間関係と、改良を加えてきた事前学習・引率システム等により、本学の留学プログラム（短期・三カ月）は事故も無く、過去に合わせて980名以上の学生が参加し、卒業生を含むそれぞれが、その素晴らしい経験を胸に、社会で活躍している。

グローバル化が進行する近年の状況下、短期大学における留学の意義は、世界的な研究者を育てることでも、卒業後すぐに世界を舞台に活躍できる人材を養成することでもない。異なる文化や習慣を持っている人や国に対して偏見を持つことな

く付き合うことのできる、大きな視野を持った、「地球時代の健全な市民」を育成することであると考えます。

相手の文化を尊重しつつ、はっきりと自分の意見を言うことができる人材を育てるため、これらの留学をはじめとした草の根の「国際理解教育」が、やがて芽を出し、参加者一人ひとりの将来に大きな花を咲かせることを願っている。

\* 本稿は、拙稿「短期海外研修における教育的意義について」（『湘北短期大学紀要』第32号、2011年）及び「3ヶ月留学における教育的意義について」（『湘北短期大学紀要』第33号、2012年）を抜粋・加筆したものである。